

震災、原発事故後の本県を扱った作品を多数書いている作家の門田隆将氏(56)は、「福島」の風評被害の払拭には、客観的なデータを積み上げることが大事」と指摘。また、吉田昌郎元福島第一原発所長ら発電所員を取材した経歴を踏まえ、昨年起きた朝日新聞誤報問題の本質について語った。【一面に本記】

「福島第一原発では過酷な労働環境の中で7千人の作業員が毎日働いている。そんな中、最近また汚染水対策をめぐり東電の情報隠しが明るみに出た。繰り返される失態の背景にあるものは。」

「現場の作業員は防護服にマスク姿。人間ああいふ状態でいると集中力が持続できず、特に夏は過酷だ。それでも一生懸命作業に当たっている作業員たちの姿と対照的なのが、東電の隠蔽体質だ。たとえ原因不明であっても、即座に発表しないと10倍、100倍の打撃を受けると分かっているはずなのに、『できれば隠したい』という気持ちが根底にあるために今回のようなことになる」

「本県の子どもたちは震災、原発事故後、運動能力が落ち、肥満度が

聞き手 編集主幹
社長 五阿弥 宏安

作家 門田 隆将氏インタビュー



「風評被害が復興の遅れの大きな要因。風評を押しとどめるのは客観的な事実だ」と指摘する門田氏

事実積み重ね風評防ぐ

発所長だった吉田昌郎氏(2013年7月死去)ら発電所員らの姿を描いたノンフィクション「吉田昌郎と福島ファイティン」(PHP研究所)を著した。どんな思いを込めたのか。

「日本の崩壊を止めたのは福島の浜通りの人々だ。『あそこまで止まらなければ、チェルノブイリ原発事故の10倍だった』とも想定された事故の直後、原発にいた浜通りの男たちは、事故対応のため極めて放射線量が高い現場に何度も突入していった。震災、原発事故からの復興は福島の人々自身が成し遂げるものだと思うが、まず『日本を救った福島』という誇りと自覚を持つことが重要だ。そのことを誰よりも子どもたちに知ってほしいと思い、本は小学5、6年生にも読みやすい内容にした。『あなたたちの先輩は、こういふふうにして日本を救ったんですよ』とメッセージを送りたい」

「昨年12月、浜通りの高校生に向けて講演した。そうした発電所員の話に、生徒たちの反応はどうだったか。

「地元の男たちが危険な現場に突入を繰り返したことを具体的に話すと、生徒たちはびっくりしていた。講演後、『地元の人たちがこれほどのことをしたということに、心が動かされた』などの感想が寄せられた。真実を知ることが一番大切だ」

「門田さんは吉田氏にロングインタビューした唯一のジャーナリスト。吉田氏の生前の調書をめぐり、朝日新聞の誤報問題をどう考えるか。

日本救った「福島」

高まった。外遊びの制限などの影響が指摘されており、放射線への不安がもたらすリスクが懸念されている。

「放射線そのものの健康影響が過剰に喧伝されていることの弊害だ。客観的データでなければ人を説得することはできないので、データを積み上げていくことが大事だ。地域によって大きく異なる世界各国の放射線量と比較しながら放射線を考えることは有効だし、これからは過去のデータにも目を向けるべきではないか。昭和30、40年代の子どもは、当時各国で行われた核実験で飛散した放射性物質を浴びたが、それによる健康影響が指摘されていないことなど、客観的なデータをいかに示すかが問われている」

「震災と原発事故に見舞われた福島の復興再生は、他の被災県と比べて遅いと感じる。この4年間をどう見ているか。

「福島は特殊な状況に置かれており、原発事故に伴う風評被害が、福島の復興が遅れている要因として大きい。海外では『福島イコール汚染』というような印象がまだに存在し、拭いていない。風評を押しとどめるのは、客観的な事実。福島の人たちにはきちんと事実を見つめ、風評に負けず復興に向け歩んでほしい」

「原発事故発生当時の福島第一原

「昨年5月の報道の際は、『これまで真実と真逆の』ことを書くのか」

「現場で突入を繰り返した人々をおとしめるのか」と怒りが湧いた。すぐに、吉田氏や所員がどういふ行動を取ったかを紹介しながら誤報を指摘した。インターネット時代の到来による『情報ビッグバン』は、それまで新聞メディアなどが情報を独占してきた状況を一変させた。それぞれ専門分野を持っている国民が、(短文投稿サイトの)ツイッターなりブログなり情報発信の道具を持つようになった。そうすると、メディアが何か専門分野について書く場合には、それなりの自覚が必要となる。そうした状況変化に気付かないまま、朝日新聞が従来の報道手法を繰り返したのが今回の問題の本質だ。新聞メディア全体にとって打撃となる出来事だったと言える」